

夢湧く夢に夢中

第5号

令和7年5月23日 文責：大谷

夢中で駆けれた、青春の舞台

十七日の本番に向けて練習をリードして

きた者にとつて、三日間に及ぶ順延は、きつと大きな不安やプレッシャーを与えてしまったことだろう。改めて心からお詫びしたい。しかし、そんな負の空気をまるで感じさせない南中生たちの姿に、改めて心動かされた。早朝からの霧雨のような雨にも動じない勢いのある姿が、そこにあったからだ。

団対抗演舞のトップは赤団だった。予行練習のときには少し声量が小さいように感じていた赤団だったが、馬場団長の第一声は、そんな不安を一掃した。大きな声を出す、さらにその声を合わせるというのは、実に難しいことで練習しなければ到底できない難技である。「この一週間で、相当練習した」ことを切に感じた。団員が一体となった掛け声は、まさに最高の「協心」だった。

次は青団だった。予行の時点で演舞の完成度は最も高く、それまでの順調さを感じた一方で、もっと足を開いて腰を落とし、たり、もっと指先まで伸ばしたりすれば、さらに見応えのある演舞になるように思った。そして迎えた本番での演舞。指先まで研ぎ澄まされた演舞と、後方の団員たちとの一体感は、見事の一言に尽きた。さらに、



まるで団旗が生きているかのごとく翻す最後の旗手による演舞も圧巻で、いつまでも青い残像がまぶたに焼き付いた。

そして、最後は黄団。取り入れている演舞が難しく、予行練習時点ではまだ覚え切れておらず未完成だった。果たして本番はどうか。そう思いながら拝見した。しかし、そんな心配はまったく無用だった。予行時とはまるで別人のような生き生きとした演舞は、鮮やかな黄色いはちまきをより一層まぶしく輝かせた。日々「陸力」してきたことを感じるものだった。

体育大会の最後を締めくくる全校応援が始まった。二百三十三人という大応援団を取り仕切らなければならぬ生徒会長以下四役のこれまでの苦労は、計り知れないほどだっただろう。これまでの尽力に心から感謝したい。と同時に、そんな目に見えない苦労を乗り越え、学校や南中生のために力を尽くしてきたからこそ、言葉ではない表情やその場の空気感に確かな自信を感じたのだった。そして、佐藤生徒会長の第一声には、南中生全員の思いを込めた強さを感じたとともに、それに感化された四役はじめ各団の団員らの結束も感動という言葉では言い尽くせないほどの感動を生んだ。「点数の付かないところにこだわろう」上林先生が常に言われていたことを忠実に積み重ねてきたことが、まさに一人一人の姿勢を「勢いのある姿」へと変えた。さて、夢中になって駆け抜けた先には何色の空が広がったのだろうか。わたしには、虹色の空が見えた。



■体育大会の雨天順延及び平日開催の判断につきましては、保護者の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。改めて心よりお詫び申し上げますとともに、御理解と御協力をいただきましたことに感謝申し上げます。また、大会当日は平日にも関わらずPTA役員の皆様には多大なご協力をいただき誠にありがとうございました。今後とも保護者の皆様のお力添えをどうぞよろしくお願いいたします。